
MOON-4 夜叉 2

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 2

【Nコード】

N 4 6 8 5 M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

九桜の直系という少女 桜と出会った秀。和人の身を案じた秀は一人で桜を探したそうとする。

ヴァンパイア
現代版吸血鬼伝説 MOON第4弾 『夜叉』 2話目です。

桜 - 1 (前書き)

こんなに連続でサイトUPすると『後』が大変だなー
Z Z (/ Z

空は晴天だった。

雲ひとつなく、ただ飛行機雲だけが一条その空を彩ってるだけである。

そんな新宿 大京町にあるマンションの一室で。

「ねえ、朝子さん。」

朝、登校を控え既に制服に着替えた裕希がカウンターキッチンでモーニングを取りながら尋ねた。「今日の秀さん、ちょっとおかしくない？」

「秀が？」

カウンターキッチンの中で、入れたてのアイス・キリマンに軽くミルクを注ぎながら答えた。「……そういえば、そうね。」

「でしょ？」

「うん。今朝だって、ピザ3枚しか食べてないし。」

長い髪を揺らして、エプロン姿の朝子は小首を傾げた。「昨日の夜帰って来て、ピザ5枚だけで終わったし、それが今朝は3枚。」
「うーん、と見つめ合う朝子と裕希。」

当の秀はというと、裕希よりも早目の食事の後、自室にこもったきりで出てくる気配もない。時折、うめき声が聞こえてくるだけである。

「朝子さん」

裕希は北側の秀の部屋を眺め、「何かピザの味付け、いつもと違ったとか？」

「そんな事ないわよ。いつも通りステーキ1枚入れたわよ。」

「そのお肉が口蹄疫に感染してたりして。」

「それもないわよ、裕希くん。ちゃんと昨日新宿のデパートで買ったばかりだもの。」

「そう……」

2人の間に沈黙が訪れる。

裕希は、白いソファに座って雑誌を読んでいる和人に視線を移し、
「ねえ、和人もそう思わない？」

「え。」

銀縁の伊達メガネをかけた和人はあつさりと、「ごめん、裕希。

全然聞いてなかった。」

「かーずーとー。」

裕希は呆れた風に、「和人って『朝』はいつもこうなんだから。
コーヒー飲んで雑誌ばかり読んでる。」

「ちょうど新しい『NEW YORK TIMES』が届いたから。」

「理由にならない。」

朝子も和人を睨みつけた。「相棒でしょ、あなたの。ちよつとは
心配したらどう？」

「そうだね。」

和人は動じせず、「何か変な物拾い食いたんじゃないのか？あいつ秀

「その程度？」

あつさりと呟く和人に向かって裕希は、

「今日も仕事なんでしょ、2人とも。……って何か今日の撮影
について悩んでる事があるとか。」

「別にないでしょ。」

和人は答えた。「秀の『昼の仕事』の心配っていったら、俺がち
やんと朝早く起きて撮影やミーティングに遅れないで来ることだろ。」

「そう言われてみれば」

裕希と朝子は顔を見合わせ、「そうね。」

同時に頷く。

そこで、はた、と裕希はキッチンの時計に目をやり、
「やばっ！遅刻する所だった！」

朝子が入れたキリマンを素早く流し込むと黒い鞆を小脇に抱えて、
「今日からバスケの早朝練習だから、もう行くね。」
そう言々と玄関へと向かい、

「和人！秀さんの事よろしくね。」

ボタン

ドアは閉じられた。

「裕希くんにあそこまで言われちゃ秀もお手上げだわよね。」

朝子は深い溜息をついた。

そこに、

がちゃ

秀がリビングへ姿を現した。

「あら、秀。」

朝子は声をかけた。「今、“約一名を除いて”貴方の事心配してたのよ。」

その秀の顔は真剣な表情だった。

「どうしたんだ？秀。」

和人は彼に声をかけた。「何か悪い物食べたのか？」

「失礼ね、和人。」

朝子が思わずふくれっ顔つらをする。

「あなたがいつものテンションじゃないから皆心配してるのよ。」

「和人。」

つかつかと、Gパンに白いTシャツ姿の秀はソファに近づき、「俺の言う事を聞いてくれ。」

「何を。」

和人は雑誌を横へ置き、「いつも聞いているだろ？」

「じゃ、今回も。」

と、言つてがしつ！と和人の両肩を掴む。

和人は、探る様に目を細くした。そして、ふと思いついた様に、

「――まさか、今度女優とタック組む企画とかじゃないだろうな。」

心底嫌そうな声だった。

「その方がまだマシ。」

秀は青いシャツの和人に向かって、「いいか、和人。聞いてるか？」

「聞いてるつて言ってるだろ。」

「じゃ言おう和人？これから先、俺がいい、という迄このマンシヨン（へや）から出ないでくれ。」

「はい？」

和人は目を丸くした。

確かに、秀の仕事以外で和人が外出する事は『夜』以外あまりないが。

「………どういう事？」

「寝ぼけてるんじゃない？秀。」

朝子は呆れた様に声をかけた。「やっぱ昨日外で拾い食いでもしたんじゃないの？」

「するか！犬じゃあるまいし。」

と、見えない尻尾をばたと振り、必死に抗議する。

「じゃ、何でだ。今日だって撮影とか言ってただろ。」

「キャンセル。」

秀は答えた。

え？と秀を見つめる和人と朝子。

「そんな事ありなの？相手は和人よ。」

朝子の言葉に、秀は、

「こつちから無期延期……とにかくここから出なければいい。」

「だから、何で。」

再び和人が尋ねる。

「あ“-。”」

秀は白い天井を見上げた。「それは？だな。」

（まさか、九桜の直系と『約束』しただなんて言えないしな・・・
・・・こうなったら早くあの子を見つけて倒すしかないしな！

）

「何ぶつぶつ言ってるんだ、秀。」

そんな秀に和人が余計不可思議な表情を浮かべる。

「そうだ！」

秀は思いついた様に、「昨日の夜お前の所へ熱狂的なファンから電話が入って、ここもつきとめてあるから和人と会わせてって。」

「何それ。」

「そんな電話入ってたかしら。」

「つまり・・・俺の携帯の留守電にだ。それで裕希もここにいるだろう？バレたら余計ヤバいから暫くは活動禁止。」

「・・・秀。」

和人は秀の黒曜石の瞳を碧色の澄んだ瞳で見つめた。「何か隠してない・・・うあっ！」

尋ねる和人に突然、ソファにあったクッションを被せる。

「危ない、見られる所だった。」

嘘である。

「そういう訳で。」

和人をクッションごとソファに残し、秀は玄関へと向かった。「ヨロシク。」

「何がよろしくだ！」

和人は、メガネをかけ直し、「・・・勝手にすればいいだろ。」
不機嫌な和人。

（悪いね、和ちゃん・・・）

ちらつ、と肩越しに彼の姿を見つめる。

「・・・」

和人は無言で秀を睨みつけている。

「それじゃ、朝子。和人の監視役頼むな。」
「何よ、それ。」

秀をめぐって『何それ』の一日が始まった。

ボタン

部屋の扉が閉められると同時に、

「もう付き合ってらんない。」

和人と朝子は、予期せず同じ台詞を口にしていた。

当の秀といえば、ドアの向こうでガッツ・ポーズをとっていた。

「これで完璧だ。後はあの子を探して倒すのみ！」

誰もいない早朝のマンションにテンションの高い秀の声だけが低く響いた。

秀は日中オフィスに立ち寄る事もなく、愛車のGT1000を使って、都内を移動していた。

隣の渋谷を周り、六本木を周り……彼女の言っていた『立ち寄りそうな所』を走り回っていた。

週中にも関わらず、オフィス街も渋谷も日比谷も原宿も若者でいっぱいだった。

『人探し』には慣れていた。仕事からのせいもあるし、秀が持つ^{ワルガイ}狼男としての本能もあった。

（もし、結界以外の場所にいたら余計『闇』の気配が判るはず。）

新宿は和人が『普通の人』を近づけさせないため、結界をはっている。それでも時折、血に飢えた『九桜の側』が結界の外から人々を新宿へと『引きずり込む』……

そんな結界外であれば、『闇』^{エナジー}の血は余計普通の人より『浮き上がって』くるはずである。

原宿の近くで秀は、単車を止めた。

目を細める。

（やっぱ『昼』は眠っているのか？）

九桜の直系と言えども、『昼の眠り』は血を消耗しないために必要なのだろうか。

しかし、昨夜の桜の話では日中も活動できるようだ。和人がはった結界へも潜り込んで来ていた――新宿以外の所から。

「・・・・・・」

若者で賑わうその光景を眺めながら、下唇を軽く噛む。

そこへ、

るるる　るるる

『踊る大捜査線』の着メロが鳴った。

「もしもし。」

『何が、「もしもし」よ、秀！』

さやかだった。『仕事放ったらかして何してんのよ、もうお昼よ！』

「そうだったねー」

空腹の秀の腹時計もそう告げていた。

『「そうだったわねー」じゃないでしょ！もうクライアントも来るし午後は撮影じゃない――和人は？ちゃんと起きてる？』

「あ――」

と、秀は青い春の空を見上げ、「和人は――そう！悪性リンパ線性風邪で当分休み。俺がOKと言うまで仕事は全てキャンセル。」

『一体どういう事よ！』

さやかは言い、暫くの沈黙の後、「・・・・・・秀、あなた何か隠してない？」

「う――」

ここには『ぶつける』クッションもない。

秀は嘘をつけないタイプらしい。

「とりあえず、先方にはそう言っておいてよ、さやかちゃん。」

『そんな！・・・』

さやかはきつい口調で、『今度のクライアントは私が所属してた
ってことあなたも知っているでしょ？』

「だから、お願いしてるの。」

『秀！』

「じゃ、ヨロシク。」

秀は携帯を一方的に切った。

今度彼女に会ったら『半殺し』に合うだろうと思いつつ・・・さ
やかが時折仕事場（青山）で差し入れてくれる、ハンバーガーの数
も大幅に減るだろうとも思いつつ、

「やっぱ、夜まで待つしかないのか。」

秀の心の中はあの少女・・・桜の事でいっぱいだった。

桜 - 1 (後書き)

感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4685m/>

MOON-4 夜叉 2

2011年1月5日01時50分発行